

伝統的なものづくりを自分の表現へと繋げる授業題材の開発について  
—日本とチェコの比較研究に基づく教材化の試み（平成29年度「理論と実践の融合」より）—

A Study of Development of Art Class Lecture That Make to Express Self Using by  
Traditional Handmade : A Developed Study from 「Fusion of theory and practice  
2017」, Trying Education Materials by Study of Comparing Japan and Czech

浅海真弓\* 村上裕介\*\*  
ASAUMI Mayumi MURAKAMI Yusuke

平成29年度に行った「理論と実践の融合」に関する共同研究「図画工作科・美術科における伝統文化学習教材化の視点と展開—チェコ共和国と日本における事例の比較から—」で明らかとなった、日本とチェコ共和国両国の美術教育における伝統・文化への取り組みの問題点を踏まえ、伝統・文化学習題材の開発を行ない、大学の授業等を通じて実践し、分析・考察を行った。その結果、それらの題材が次世代を担う子ども達に必要なと考えられる能力（コンピテンシー）の獲得に有効であることが分かった。

キーワード：伝統・文化、ものづくり、自己表現、チェコ共和国

Key words : tradition · culture, hand making, self express, Czech Republic

（はじめに）

本研究は平成29年度に実施したチェコ共和国カレル大学マリー・フルコヴァ博士と行った「理論と実践の融合」に関する共同研究<sup>1</sup>により明らかになった両国の図画工作科・美術科における伝統文化学習の現状や課題を踏まえ、学校教育美術科における伝統・文化題材を開発し、実践等を通し、その有用性を検証するものである。

20世紀末から21世紀にかけての各国の教育改革において、OECDのキー・コンピテンシーなど21世紀型スキルと呼ばれる育成すべき資質・能力を同定し、教育内容の充実を図る方向性が模索されてきた。多少の違いこそあれ、各国が設定する資質・能力は大きく基礎的リテラシー、認知スキル、社会スキルの3つに区分できる。我が国でも学習指導要領の改訂（平成27年3月公示）により、教育課程全体で資質・能力の視点で目標・内容が整理され、美術教育においても資質・能力の三本柱の視点での教育が展開されようとしている。こうした教育変革の中で、視覚化するテキストを受容、解釈・咀嚼し、それを共通言語としながらも自らの表現として発信する能力の育成が重要視されつつある。又、平成18年に交付・施行された教育基本法では教育の目標の一つとして、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」が明記され、平成29年に改定された小学校学習指導要領においても

同様に、伝統や文化に対する尊重する心を養い、それらを育んできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図ることが目標として掲げられた。足元の伝統や文化を見直し、それをうまい表現することは世界に目を向け新たな創造を広げることに繋がり、先にあげたキー・コンピテンシーの三つスキル全てに係るものである。カレル大学との共同研究では、我が国の伝統・文化理解につながる教育を推進する機運は高まりつつあり、図画工作科・美術科の授業においても近年、教科書では伝統・文化は主に鑑賞領域で取り上げられる割合が増加していることが分かった。しかし同時に実際の学校現場での取り組みは、地方や各学校によって様々で温度差も大きく、教員の経験と裁量に任されており、図画工作科・美術科での取り組みについても一様でなく、取り組まれているその内容は作品や作業風景の鑑賞や技能の体験といった鑑賞の領域の中での表現に止まっている問題点も浮かび上がってきた。

欧州委員会（European Commission）は2006年（平成18年）、「生涯学習のためのキー・コンピテンシー—ヨーロッパの準拠の枠組み」と題し、提言を行った。その13カ国の国際機関と40名の専門家によりまとめられたキー・コンピテンシーの中で、特に目を引くのは8番目の「文化的気づきと表現」である。これはアイデアや経験、感情の音楽・劇・視覚的芸術を用いた創造的な表現の重要性に気づき、表現する力のことで、OECDの

\*兵庫教育大学大学院人間発達教育専攻芸術表現系教育コース 准教授

令和元年10月25日受理

\*\*兵庫教育大学大学院人間発達教育専攻芸術表現系教育コース 教授

DeSeCo (Definition and Selection of Competencies) プランをはじめ他のコンピテンシーの枠組みの中には見当たらなかったものである<sup>2</sup>。この提言は学校教育の先にある、より良く生きるための生涯学習のための力についてのものであるが、当然ながら生涯学習の基盤となる学校教育にも関わってくる能力でもある。欧州委員会の加盟国でもあるチェコ共和国では美術教育における表現は、自分の意思や思想的確な方法を適用し、いかにビジュアルでどう表現し相手に伝え、その中で自身のアイデンティティーを確立していく表現能力の育成に重点を置いている。鑑賞においても鑑賞対象が日本では、優れた作例という前提での自分とは乖離した存在として鑑賞される傾向があるが、チェコでは過去のアートの文脈を自己の表現にどう生かすかが指導される。しかしこのためか、チェコにおいては直接的に個人の内面等を「表現」することには適しているとは言えない伝統文化に関する題材は、美術の授業の中で取り上げられることが少ないことが分かった。その一方、チェコでは近年、民主化により表現の自由が認められることにより、多様性が失われ、チェコ独自の表現は消え、西洋のどこにもある価値観や美意識があふれる現実を危ぶむ声が上がっている。

このような両国の美術教育における伝統文化学習の状況を比較した調査等から、日本においては伝統的な技法のあり方を踏まえ、それをうい、今に生きる自分たちが表現していく学習題材の開発が必要であることが分かった。そこで小学校高学年・中学生を念頭に置き考えた伝統・文化学習教材の開発を行い、まずは本学の初等図画工作の授業の中で大学生を対象に実践を行った。又、チェコ共和国においては伝統・文化を用いた学校教育における美術題材としてどのようなものが提案出来るのかをチェコからの留学生の協力を得、検討した。

## 1 日本の学校教育美術における伝統・文化の取り扱い方

日本の学習指導要領では各教科に渡って、日本の伝統・文化理解につながる指導内容についての記述がされており、伝統・文化理解につながる教育を推進する機運は高まりつつある。ところで前述の教育基本法改定では「我が国の伝統と文化」という記述が見られる。「伝統文化」ではなく「伝統と文化」とされているのは、過去の文化の継承のみならず、現代文化の中に息づく伝統的要素の比較検討や考察、さらには新しい文化の創出や国際理解をうながす要素を含む展開が期待されているからである。本稿ではその趣旨を踏襲し「伝統文化」ではなく「伝統・文化」と表記する。

図画工作科や美術科の教科書では伝統・文化に係る内容は主に鑑賞領域で取り上げられている。では実際の

学校現場での伝統・文化に係る内容の取り組みはどうかというと、先にも述べたが、地方や各学校によって様々で、熱心になされている場合でもその内容は、作品や作業風景の鑑賞や技能の体験といった鑑賞の領域の中での表現に留まっている。平成29年の小学校学習指導要領及び中学校学習指導要領では、グローバル化やAIの普及の中での世界的な教育課程の改訂の流れを捉える形で、「予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのか」という目的を自ら考え、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要である<sup>3</sup>とし、学校教育が長年その育成を目指してきた「生きる力」を具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の3つに整理し、全ての教科等の目標及び内容もこの三本柱に基づき再整理を図るよう提言がなされた。図画工作科・美術科では教科の目標の下に各学年の状況に合わせた学年の目標がおかれ、内容として「表現」と「鑑賞」が設けられている。「表現」ではそれぞれに(造形遊び)、(絵)、(立体)、(工作)に(1)「表現」を通して育成する力として「思考力、判断力、表現力等」の発想や構想に関する項目、(2)として「表現」を通して育成する力として「技能」に関する項目が構成されている。ここで注目したいのは「鑑賞」を通して主に育成するのは「知識及び技能」ではなく「思考力、判断力、表現力等」とされている点である。日本においては、美術の一般的な認識として、「崇高にして、冒しがたい領域」というとらえ方が依然としてあり、それ故に、伝統・文化に係る美術作品、または、現代の美術作品を扱う時でさえ、自分の存在している世界とは乖離した存在としてあるものという感覚が少なからずある。しかし「鑑賞」活動により育成する力は教養的に名品について知る受動的なものではなく、鑑賞活動を通じて考え、選択し、発信する能動的に活動する力が求められている。それ故、伝統・文化の鑑賞においても自分たちや自分たちの生活と乖離した存在ではなく、自分たちに繋がる表現であることを学ぶ必要がある。さらに「鑑賞」に留まらず、伝統・文化題材を今を生きる子どもたち自身の「表現」として発信する授業題材として取り上げることが重要である。

## 2 伝統的な題材を授業に取り入れるための課題と効果

伝統・文化に係る内容を図画工作科・美術科の特に表現の授業題材として取り入れるのは様々な課題がある。まず、技術が特殊かつ専門的なものが多く指導が困難

であること、又、素材の入手が難しい点も挙げられる。それ以上に問題なのは伝統・文化に係るものづくりが、工程が多岐にわたり、それが一つひとつの工程が長く変化に乏しく、手間がかかり、直ぐに結果や効果を感じることが出来ないものが多いことである。このことが減少している図画工作科・美術科の授業時間数の中で授業題材として取り上げることのハードルを高くしている要因の一つだと考えられる。又、何かと短時間で結果の出ることが重視される風潮がある現代社会において、それは旧態依然とした進歩の無いものとして捉えられる危険性が高い。しかし、この伝統的なものづくりの単調で手間暇かかる工程こそが、次世代を担っていく子どもたちにとってより良く生きる力を養う効果をもたらすのではないだろうか。アメリカにおいてグーグルやフェイスブック、マッキンゼー等の企業や政府機関や学校においても広く取り入れられている「マインドフルネス」瞑想は、最近日本でも多くのメディアに取り上げられ、注目されている。「マインドフルネス」とは‘今ここ’にただ集中している心の有様、状況のことを指す。自分の呼吸等に注意を払うことによりもたらされる「マインドフルネス」状態においては、心の内より雑念を取り除かれ、集中力や洞察力、直感力が高まるとされる。又この時、脳内では神経伝達物質のセロトニンが分泌されている。セロトニンは同じ神経伝達物質のノルアドレナリンやドーパミンの分泌を調整し、心のバランスを保つ役割を果たすとされる。工芸や手芸の作業は、脳の活性化につながることから、以前より作業療法等に活用されているが、これも手仕事の反復作業に集中することにより、セロトニン神経が活性化するところが大きい。つまり、伝統的なものづくりに取り組むことにより、現在、世界のビジネスの最先端で求められている心の状態を得ることが期待出来るとも言えるのではないだろうか。

### 3 実践 ケース1（張子に関する伝統・文化学習のための実践）

#### 3-1 実践の概要

伝統的なものづくりを図画工作・美術科の授業題材として取り入れる課題や効果を考慮し「張子（はりこ）」の題材を考案し、初等教員を育成するための授業において本学の学生を対象に実践した。

○題材名「伝統的な張子面で表現する未来の私」

○題材の目的

伝統的な張子作品を鑑賞し、その制作方法を知り、その技法をもとに将来の自分を想像し表現する。又、完成した作品を鑑賞し、付箋を用いた評価を行う。

○対象 兵庫教育大学学部学生（2, 3年生）28名

○実施時期 令和元年6～7月

○実施時間 90分（45分×2）×4回

○材料・道具

土粘土（陶芸用白土）、和紙（書道用半紙）、新聞紙、デンプン糊、ビニールラップ、ジェットもしくはアクリル絵の具（白色）※地塗り用、透明ニス、紐、竹串、筆、ハサミ、絵の具（各自用意）、ドライヤー、陶芸用輪かん（土を彫り出すため使用）、錐

○鑑賞した張子作品

はこた人形・人形、うさぎ（鳥取県）

姫路張子玩具・狐面（兵庫県）

三河張子・犬張子（愛知県）

○調査方法 実践後行った自由記述のアンケート、又学生の題材に取り組む様子の観察。

○題材の展開と時間

- 1（45分）①張子の鑑賞・張子についての解説。（写真1）
  - ②-1土型作り（自分の顔の半立体レリーフを作成）この際、後で上に紙を貼り重ね、張子を取ることを考慮し、抜け勾配形状となるよう注意する。
- 2（45分）②-2土型はサランラップで養生し、乾燥し硬くならないようにする（万が一、型が内に入り込んだ形状となった場合でも粘土の柔らかい特性を利用し、張子が抜けるようにするため。（写真2）
- 3（45分）③和紙（習字用半紙）を適当な大きさに切り、最初の3層、水だけで土型に貼り付けていく（最初に糊の入った水を使うと型に張り付くため）。
  - ④-1新聞紙を適当な大きさに切り、でんぷん糊を10%ほど水に溶いたものを用い、7層ほど貼り重ねる。（写真3）
- 4（45分）④-2 ④-1の続き
  - ⑤和紙（習字用半紙）を④で用いた糊水を使い3層、貼り重ねる。（写真4）



写真1



写真2



写真3

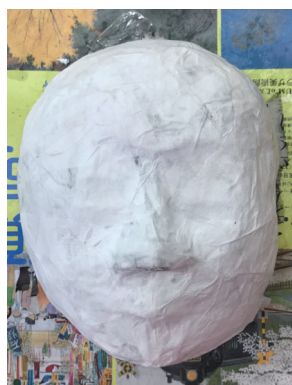


写真4



写真6



写真7



写真5



写真8



写真9

- 5 (45分) ⑥ドライヤー等で乾燥の後、土型から張子を外し、縁のはみ出し部分をハサミでカットする。(写真5)  
 ⑦張子の縁を糊水を使い和紙で巻き貼る。  
 ⑧張子全体に白いジェツ、アクリル絵の具等を塗る。
- 6 (45分) ⑨10年後の自分を想像し、張子の面上にデザインし、絵の具を用い表現する。(写真6)
- 7 (45分) ⑩張子面を着用するための穴を二つ錐であける。  
 ⑪全体にニスを塗る。  
 ⑫土型のビニールラップを取り除く、底を彫り取り、全体を修正し、土面に仕上げる。
- 8 (45分) ⑬張子面に紐をつけて完成。(写真7, 8, 9)  
 ⑭一作品ずつ仲間の張子作品を見て回り、付箋に肯定的な乾燥を記し、作品周囲に貼っていく。  
 ⑮付箋のコメントを参考にしつつ、自分の作品の優れた点等を考察する。  
 ※土面は後日焼成。

### 3-2 張子とは

張子は、木や粘土で作った型や枠に糊を含ませた紙などを幾重にも張り、成形する造形技法、又は造形作品である。張子の技術は中国に始まったとされ、その後、広くアジアやヨーロッパに伝わった。日本には平安期頃に技法が伝来し、広がり、江戸時代には会津張子、博多張子、琉球張子等、全国各地で郷土玩具が作成された。伝統的な張子の主なモチーフは犬や虎、牛(赤ベコ)、狐、あるいは十二支、人物像(おかめ、ひょっとこ)等であるが、近年各地の産地で自由な発想でオリジナルな表現が多く生み出されている。その理由として張子の多くが農閑期に土産物などとして制作されたことから判るように、比較的容易な技法であり、自由度が高いことがある。このような特質から今までも比較的学校教育の現場でも取り上げられることが多く、親しみを抱きやすい題材と言える。

### 3-3 題材選定の理由

張子を伝統・文化の題材として選んだ理由として、指導者である教員側の視点としては技法の簡単さと素材の入手しやすさがある。又、鑑賞資料である実物が、各地で制作されているため、入手しやすく、又、比較的安価であるという点がある。一方、授業を受ける側の立場、児童・生徒の立場からすると、やはり技法が容易であり、

思ったように表現しやすいという利点がある。さらに、張子は伝統的なものづくりの中では比較的短時間で完成させることが可能である。しかしこのような張子は手軽で容易な技法故に伝統的な技法だと解釈されず、低年齢層の造形活動では土台に風船を用いるなどした単なる造形技法として取り扱われることが多いことが問題でもある。この点を逆手に取り、改めて張子が伝統的なものづくりであることを学ぶ機会を設けることにより、印象強く張子の伝統・文化性について伝えることが可能であると考えた。

### 3-4 授業題材として工夫した点

授業として取り入れるため工夫した点として、まず土型を作成したことがあげられる。多くの伝統的なものづくりは、必要とする人々に届けるために数多く効率的に生産出来るよう工夫がなされている。張子の多くも同じ形状のものを複数生産できるよう型（木型、土型）が用いられている。このことは張子が技や表現の妙を鑑賞する芸術作品としてではなく、人々の生活に密着していたものであることを物語っている。例えば今回鑑賞作品として取り上げた、はこた人形は実際に小さな子ども達がおぶったり、ママゴト遊びに用いていた玩具である。又、犬張子は安産のお守りや生まれた子どもが宮参りの際に携える縁起物として広く人々の間で用いられてきた。学校の授業時間で題材として取り上げられる張子作りでは、多くの場合、型の役割を果たすものとして風船や油粘土等、一過性のものが用いられ、繰り返し使われることはない。今回は張子が人々の身近にあり、複数生産されていたことへの理解を促すために、敢えて土型作りを取り入れた。題材のテーマは自分の顔を表した面である。尚、今回は現在の学校教育の限定された授業時間数の中で様々な材料経験をする機会を提供する必要性を考慮し、土型の素材として陶土を用い、土型は土型だけに終わらせず、裏面をくり抜き、形を整えた後、焼成し、自分の顔を表した土面作品として完成させた（焼成後も土型としても使用可能）。そのため土型は最終的に土面作品として完成させるため、学生達にはスマホや鏡を用い、丁寧に観察しながら自分の顔をリアルに再現（写実）することを課した。一方、土型から作る張子はテーマとして同じ自身の顔としているが、理想の将来の自分像とし、抽象的表現とした。これは伝統的なもの作り技法を用いつつ、それを今を生きる自分自身の表現とするためであり、このことにより学生が伝統・文化をより身近なものとして捉えられることを狙った。

紙を貼り重ねた後の地塗りには、伝統的な張子の技法では「胡粉（ごふん）」を用いる。「胡粉」は貝殻を粉末状にしたもので作られ白色の顔料であり、日本画や日本人形の制作にも多用される伝統的な素材である。「胡粉」

自体には粘着力がないため、支持体に定着させるために「膠（にかわ）」を添加する。「膠」は動物の皮や骨、腱から作られる溶剤である。「胡粉」、「膠」は素人が扱うのは些か難しい素材である。このため、今回は「胡粉」等の実物を示しての説明に止め、地塗りにはアクリル絵の具を用いた。

### 3-5 分析と考察

今回の題材のねらいに対する成果等を学生たちの活動の様子と自由記述による事後アンケートから考察していきたい。

まず活動初回の張子について知っていたかという問いに、ほぼ全員の学生から知っていたとの回答を得た。実物の作品の鑑賞にあたっては一様に興味を持った様子で「可愛い」「欲しい」という声が多く上がり、全体の鑑賞後も個別に実物を手に取り熱心に眺める様子が見られた。姫路張子玩具に関して姫路出身の学生も知らなかったらしく驚く様子が見られた。一方、張子の制作体験がある者も全体の半数以上居り、表現として多くの学校教育の場で用いられている技法であることが再確認出来た。これらのことから、今回活動に参加した多くの学生が張子についてどこかで名前を聞いたことがあり、臆げなイメージを持ち、制作した経験もある一方で実際に本物を鑑賞した経験が殆ど無いことが分かった。さらに作業工程を説明する中で型から制作するという意味がなかなか学生に伝わらなかった。このことから、張子の制作にあたって繰り返し使える型による制作は殆どなされておらず、型生産により数多く作られ人々の生活の中で活用されていたものであった歴史等も知られていないことが分かる。人々のニーズに応えるため、まとまったロット数の生産することが多い伝統的なものづくりの特質を伝える観点からすると、今回の土型から制作する題材は妥当であったと考える。

今回のアンケートの学生の記述で一番多く見られたのが作業の大変さへの言及である。

「紙を貼っていく作業は大変だった」

「張子が出来るまでたくさんの紙を重ね、時間がかかることが分かった」

「張子は見えて知っていたけど、制作がこんなに手間がかかるものだとは知らなかった」

「張子の制作は地味な作業だと分かった。テレビ等で取り上げられる張子も同じように作られているのだろうが、私にはあんな美しく作れそうもない」

実際、紙を貼り重ねていく作業は2時間（90分）であり、伝統的なものづくりの作業工程としては決して長い時間ではない。しかし現代の若者にとっては単調で長いと感じる時間の長さであることが分かった。とは言うものの、その単調さと長さが嫌なことかというところ

も限らず

「物を作るのは大変だけど楽しい」という記述が見られた。実際、活動様子の観察でも紙を貼り重ねる作業の間はグループ毎（1グループ4～6名）にテーブルを囲む活動であったにもかかわらず、活動の最初の方はざわついていたが徐々に静かになっていったことが確認出来た。学生の記述においても

「単純な作業の繰り返しだったので、私語が無くなり、自然に集中することが出来た」

とあり、単純な作業の中、一つの作業に集中することで多くの学生がマインドフルネスに近い状態となっていたことが推測出来る。

又、作業工程からものづくりの基本を学びとった記述も見られた。

「紙が糊を用い重ねていくことでかたい面になることに驚いた。基礎となる土型の制作が大切であること思った」

「張子の面作りでは周りを丁寧に加工することでもろさや崩れやすさを緩和されることが実感できた」

さらに、失敗からの学びがあったことが次の記述等から伺える。

「和紙と和紙同士をきっちりと水や糊で貼り合わせることを徹底すべきだった」

「土台（土型）からしっかり作らないと後にひびくことをこの題材から学んだ」

これらの記述からは張子制作の作業の過程や失敗の中で「思考力・判断力」が働いていったことが伺える。

出来上がった張子面に将来の自分を表現することについては特に多くの肯定的な記述がみられた。

「紙を貼っていく工程はしんどかったけど、色を塗る作業は楽しかった」

「張子の面の絵付けは自分のイメージや世界を拡がってとても良いと思った」

「張子の面の絵付けは未来の自分を想像し描くのは楽しく、将来像を考える上でも良いと感じた」

「張子面は、単純に顔を描くのではなく、自分を表すものや理想や夢を描くというテーマが興味深かった」

決められた地道な作業の末に自由に自身を「表現」出来ることにより、多くの学生が今回の題材を開放的で楽しいものと捉えたことが分かる。

### 3-6 成果と課題

今回の題材に対するアンケートでは伝統的なものづくりを学ぶことについて次のよう積極的な記述も見られた。

「日本での伝統を感じながら作業に取り組むことができた。地味な作業を続ける中、適当にならず丁寧に作り上げることが出来た。地味だが作品や自分に向き合う

時間はとても大切だと実感した。なかなか伝統芸能や工芸に触れることが出来ないの、この機会を生かして自国への関心を向けていきたい」

この学生は本実践の張子作りを通して伝統的なものづくりの本質を捉えたことが伺える。その他のアンケートの記述や活動の観察からも、多くの学生が伝統的なものづくりと共に自分を自由に表現する楽しさを実感し、理解を広めたことが分かる。

造形的な活動や授業の際、よく聞かれるのは「自分は絵が得意ではない」という消極的な発言である。しかし今回の活動による作品の良し悪しは「絵が上手下手」により決まる要素は少ない。丁寧に確実な作業が出来上がった張子面の美しさを左右し、その上に施された表現の面白さ、斬新さが作品の魅力となる。活動の最後に、自分以外の作品に肯定的な感想を記す付箋を用いた鑑賞活動を行った。付箋には「きれい」「丁寧に作られていて好感が持てる」「形に勢いがある」「発想がユニーク」「色使いが斬新」「アイデアが脱帽」「個人的に欲しい」等、様々な豊かな言葉の表現が見られた。これらの評価は、正に伝統的なものづくりの特徴である地道な作業への評価と個人の自由な表現への評価であり、画一的な「上手さ（多くの場合写実性がある）」という評価基準とは異なるものである。これらの付箋の感想を参考に、今回の活動の最後に自分の作品の優れた点をまとめる活動を行ったが、ここでは今まで自身で気づかなかった自身の造形や表現に係る力に驚いたり、喜んだりする記述が多く見られた。造形や表現における優れた点を多様に評価出来るという点においても今回の題材は成果があったと言える。

小学校や中学校においても良く耳にする図工や美術の時間で制作した作品を持ち帰らない問題は、大学の授業においても同様である。子どもの場合は親が帰ることを拒むケースも多いと聞く（ゴミになる、部屋が散らかるという理由で）。同様なことは現職教員を対象とした講習でも起こる。もはやモノを捨てることが賞賛され、そのテクニックがもてはやされる現代日本人に共通した問題であるともいえる。モノがあふれる時代、多くのものの価値はその貨幣価値により押し量られる場合が多い。子ども対象の鑑賞活動の中でも「その絵いくら」と価格を問われることが少なくない。モノに対する思い入れは時には「お金」を超えた価値を帯びることを忘れがちである。今回の張子面は鑑賞活動の終了後、学生によって全ての作品が持ち帰られた。張子面を着用し携帯で画像を取り合う姿や、着用したまま帰る様子も見られた。長時間、工程を踏み地道に制作した張子面は多くの学生にとって思い入れや愛着のある「モノ」となったことが分かる。このことは当初は想定しなかった成果であった。

今回の張子題材の実践では、鑑賞作品として現代的な自由な表現の張子作品を準備することが出来なかった。伝統的なスタイルなものと同時に現代的な表現がなされたものを鑑賞することによって、より自由で自己表現が可能であることを伝えることが可能であったはずである。このことは次回への課題としたい。又、伝統的なものづくりの複数生産性への理解を促す目的で土型の作成を行ったが、張子面は一面の制作で終わった。土型は焼成し土面としたことは技法体験や表現の幅を広げるという意味では有意義であったが、本来の伝統的なものづくりへの理解を促すという目的からは外れている。時間の制約はあるが、張子を複数制作する工夫が必要である。今回は初等教員を目指す学生を対象に実践を行ったが、ここで得た課題を踏まえ、今後、小中学校の児童、生徒対象に実践を展開していきたい。

#### 4 実践 ケース2（漆に関する伝統・文化学習のための実践）

漆は古来より天然の塗料、接着剤として利用されはじめ、光沢の美しさや材質の堅牢さから、日本の伝統美術として漆芸品や仏像彫刻等において高い評価を得ている。学習指導要領において日本の美術の重要性について言及されるようになり、学校教育において日本及び諸外国の作品の独特な表現形式を活用すること、日本の美術の歴史や表現の特質、日本及び諸外国の美術文化について理解を深めること等が目標として挙げられている。それらのことを踏まえ、平成30年に「美術科授業における彫刻技法に関する教材について－乾漆彫刻技法のモデリングペーストによる応用－」<sup>4</sup>において、日本の伝統美術である乾漆彫刻を理解するための教材として開発した。それは中学校・高等学校の美術科授業においての提案であったが、本研究では、その研究を踏まえ小学生を対象とした教材として改良し、ワークショップとして実践を行った。

##### 4-1 実践の概要（ワークショップ）

日本の伝統的な漆芸や乾漆彫刻における錆（さび）付けの技法を応用し、カラフルなオブジェをつくるワークショップを行った。漆器や乾漆彫刻に用いる錆に着目し、その錆づくり（錆とは、水練りした砥の粉に漆を加え、さらに良く混ぜ合わせペースト状にしたもの）を安全性と簡便化を考慮し、漆の代用としてモデリングペーストを使用することで、かぶれの危険性を排除するものとした。漆器や乾漆彫刻の技法の一部を、児童の造形活動に組み込み、現代的な感覚によるカラフルなオブジェづくりを楽しむワークショップである。

実際のワークショップでは、まず、漆に関する性質や歴史、および利用方法等について、わかりやすく解説し、

次にモデリングペーストによる錆づくりを指導者が実演しながらさらに説明を加えた。その後、児童による自由な発想を促しながら作品づくりへと展開していった。なお、このワークショップは、『姫路きょういくメッセ 学校教育体験ワークショップ 図画工作科』平成31年2月2日、2月16日の両日に開催され、平野兼伍教諭（姫路市立曾左小学校）の協力・指導のもとに行った。

##### ○材料・道具

砥の粉、水、モデリングペースト、水彩絵の具、ペインティングナイフ、プラスチックへら、筆、紙パレット（練り板に代わるものとしてガラス板や下敷き等でも可）、木片（錆つけするための心材であり、発泡スチロールや空き箱等でも可）等。

##### ○手順

- ①砥の粉をすりつぶしたものに水を加え、良く練る。
- ②水練りした砥の粉にモデリングペーストを加え、さらに練り混ぜ合わせる。次に好きな水彩絵の具を加え、漆の技法における錆づくりと同様にカラフルなペースト状の絵の具をつくる。（写真10）
- ③好きな形の木片等に、②でつくったカラフルなペースト状の絵の具をペインティングナイフやへらを使い、厚みをつけるように塗り重ねていく。（厚みは2～3mm以下とする。漆の錆つけと同様に、一度に厚く塗らないように注意する。漆とモデリングペーストの硬化反応は全く違うが、漆は厚塗りすると硬化せず、モデリングペーストの場合は、ひび割れを生ずる）
- ④乾燥させて完成。（塗り込めた厚みと温度等の条件によるが、表面乾燥だけなら30～60分程度で触ることができる）（写真11）



写真10



写真11

#### 4-2 成果と課題

ワークショップにおいて、参加した児童たち全員が「練って混ぜるのが楽しい」、「色を混ぜて好きな色に出来るのが良い」等との発言があった。今までの絵を描くような感覚ではなく、様々な色を作り、それを盛り上げて形作っていく感覚は、新しい体験であったと思われる。それは単に何かに色を塗る（塗装）感覚ではなく、半ば立体作品をつくっていく感覚に近いものであったはずである。現代は簡単にCG作成ができる時代である。絵を描く場合も専用のペンとタブレット等を使用し、画面の配色パレットから色を選択し、はみ出さないように簡単に色を付け、気に入らなければ一瞬にして消去、やり直しができる。確かにその良さもあるのだが、このワークショップでは、砥の粉をすりつぶし、水を加えて練り、さらに絵の具も混ぜ合わせるやや複雑な工程を必要とする。また気に入らないからと簡単にやり直しも効かない。又、それらの工程は、視覚や触覚、また聴覚等を用い手指の運動によって行われる。本題材は子ども対象に開発した題材であるが、この工程は伝統的なものづくりの感覚と同様のものであり、その背景は伝統的な技が息づいている。

実際のところワークショップの短い限られた時間の中で、児童にとっては日本の伝統芸術としての漆芸品や乾漆彫刻への理解が深まることは必ずしも期待できない。しかし多少なりとも有益な経験として心に刻まれたことが子どもたちの様子から見て取れた。同題材を図工の授業として、あるいは他教科との連携をとりながら実践する際には、十分な事前学習や制作時間を確保できれば、日本の伝統・文化学習の一助となり、その効果は十分に期待できるものと思われる。

#### 5 実践 ケース3（イースターエッグに関する伝統・文化学習のための実践）

2019年4月よりカレル大学（チェコ共和国）より、日本の漆に関する研究を目的とする大学院特別聴講生を受け入れている。平成29年度にカレル大学マリー・フルコヴァ博士と実施した「理論と実践の融合」に関する両国の伝統文化学習の共同研究の際に、カレル大学において日本の伝統芸術を紹介するミニ講義を行った。そのミニ講義を受講したカレル大学学生サビンツォバ・カロリーナ（SAVINCOVA KAROLINA）が、日本の漆芸や乾漆彫刻に関して興味をもち、留学生として日本で漆に関する研究をすることとなった。

チェコにおける伝統文化学習では、伝統文化の教育は教員の経験や裁量に任されており、博物館や装飾美術館等の現地において学習する機会が多い。伝統文化に関する題材は、学校の美術の授業の中で取り上げられることが少ない状況である。そこで当該留学生とともに、両国

に共通する伝統文化学習の教材開発として、チェコのイースターエッグの伝統的な図案と日本の漆芸の美しさに着目し、それらを融合した漆を用いたイースターエッグづくりの教材研究を行った。（写真12）



写真12

チェコでのイースターエッグは、キリスト教が広まる前のスラブ民族の太陽信仰の時代に始まったとされる。太陽に最も近づくことができる鳥を神の使者として捉え、そしてその鳥の卵は、神聖な生命の源として崇められ人々の様々な願いを込め装飾される。卵に描かれる伝統的な図案は、動物や鳥等の姿は写実的ではなく簡略化されており、太陽や星、大地等は幾何学的な模様として描く特徴がある。イースターエッグの作り方において、地域によって少しずつ技法が異なるが、本研究においては、チェコの伝統的なイースターエッグの図案を色漆で描くことを目的とした。日本の漆芸の繊細な図案や色・艶の美しさとともに漆の扱いや制作工程の伝統技術とチェコの伝統的なイースターエッグの風習、および図案やその色とが両国にとって魅力ある伝統文化学習教材として相乗効果をもたらすことが期待出来る。

##### ○材料・道具

色漆（朱・赤・紫・弁柄・あざぎ・青・草色等）、呂色漆、鶏卵の殻、蒔絵筆あるいは面相筆、ガラス板、テレピン、たね油（筆洗浄用）、木箱あるいはダンボール箱（内壁に水を霧吹きし、湿らせた布等を入れておく）

##### ○手順

- ①卵の上下2箇所小さな穴を明け、中身を取り除き良く洗浄する。
- ②蒔絵筆あるいは面相筆等を用いて色漆で図案を描く。（塗りにくい場合は少し呂色漆を混ぜ粘度を調整する）
- ③乾燥させる。（漆風呂の代用として、木箱やダンボール箱の内側を湿らせたものに入れる）
- ④上記②および③を数回繰り返す、完成。（漆は厚塗りできない）

##### ○成果と課題

実際のイースターエッグの装飾は、顔料を混ぜた蜜蝋



でペン先のようにまち針等を使い、溶かした蠟で図案を描いていく、あるいはイースターエッグ装飾専用の金属性の小さな漏斗を使い、漏斗に固形の蠟と顔料を入れ、ロウソクの炎であぶりながら蠟を溶かし、漏斗の先の小さな穴から溶け出た蠟で文様を描いていく方法で成されている。本研究では、漆を使用することから蒔絵筆(面相筆)を用いて卵の表面に色漆で描く方法をとった。卵の殻は、漆芸においても使用される材料であり、漆との相性は非常に優れている。伝統的に卵の殻は、漆芸の加飾に使われており、漆は元来、完全な白色が出せないため、卵の殻を小さく砕き、モザイクのように漆で張り付けて白色部分の表現に使用される。

本実践の唯一の難点は、漆は人により、皮膚にかぶれを生じさせる可能性があることである。留学生にはかぶれる場合があること等、事前に漆を扱う際の注意を十分に行った。幸いにして軽いかぶれで済み、今後も継続して研究していきたいとのことである。なお、漆の代用として合成漆等を使用すれば<sup>5)</sup>、ほぼ見栄えは変わらない同様な効果を得ることができるが、留学生は伝統的な材料である漆の使用を選択した。それは本研究で作成したイースターエッグの図案は、留学生が祖母から教えられたというチェコの伝統的な文様であり、チェコの伝統と日本の伝統を融合させた伝統文化学習の開発への強い思いからの取り組みであった。そこには伝統に対する強い愛着が見受けられる。

漆の色についてはチェコの伝統的な色を、それに近い色漆の中から選択した。勿論、色そのものに様々なチェコにおける伝統的な意味が込められている。

留学生はチェコの学校教育において図画工作科・美術科の時間に、伝統的な図案や伝統的なものを取り入れた授業を受けておらず、多くの普通学校においても同様であると言う。日本においても、近年、伝統文化学習の重要性が唱えられはじめたが、実際のところ十分な教育が行われているとは言い難い。

本実践から、チェコのイースターエッグにおける伝統的な図案や日本の伝統的な漆芸の「知識」や「鑑賞」に留まらず、これからのグローバル化社会の意味をも踏まえ、今を生きる人間の「表現」に繋がる伝統に対する捉え方や考え方、他国の伝統・文化理解も含めた新しい伝統文化学習としての可能性を見いだした。

## 6 おわりに

「伝統・文化」と聞くと我々は旧態依然としたなにやら古めかしいイメージを抱きがちである。しかし過去において起こった多くの文化が人々のニーズに添えなくなり、消えていった中、長い間支持され、今も生き続けているものこそが「伝統・文化」なのである。例えば今最先端とされる今世紀に始まったものづくりが 100 年

後も続いているだろうか。恐らくはその多くが消え去っているだろう。それ故、今に続く伝統的なものづくりには長い間蓄積された人々のアイデア、経験や感情が宿っている。そしてそれを体験することで先人の創造性に触れることが出来る。しかしそれは過去を振り返る、継承するだけの作業でない。連綿と続いてきた伝統の鎖の先端にさらなる一輪を付け加える作業であり、一世代では一人ではなし得ることが出来ない壮大なプロジェクトに参加することである。そういう意味において、やはり「伝統文化」ではなく新たなクリエイションを目指す「伝統と文化(伝統・文化)」と言い表すことは正鵠を射ている。はじめにでも述べたが、チェコは自由化によりここ約 30 年で大きく変貌を遂げた。変化には長短両面あるのが常ではあるが、「理論と実践の融合」の研究を通じてチェコらしさが失われた、失われつつあることを嘆く声を多くの人から聞いた。グローバルゼーションは決して画一化とイコールではない。豊かな創造性の土壤には言うまでもなく、多様性が不可欠である。言うまでもなく多様性への適合は今我々が突きつけられている喫緊の課題である。他者の文化に敬意を払うためには、自身の文化に敬意を払う必要がある。今後もこの点に着目し、美術教育における伝統・文化の学習題材の開発を通じ、子どもたちがより良く、幸せに生きるコンピテンシー育成を計っていきたい。

- 1 浅海真弓, 村上裕介, 平野兼伍, 2017, 「図画工作科・美術科における伝統文化学習教材化の視点と展開—チェコ共和国と日本における事例の比較から—」, 『「理論と実践の融合」に関する共同研究 研究成果報告書」, 2017 <https://www.hyogo-u.ac.jp/riron/asaumi/>
- 2 文部科学省, 教育課程企画特別部会 論定整理(案)補足 参考資料, 2015, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryou/\\_icsFiles/afiefieldfile/2015/09/04/1361407\\_2\\_3.pdf#search](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryou/_icsFiles/afiefieldfile/2015/09/04/1361407_2_3.pdf#search)
- 3 文部科学省, 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)(中教審第197号)2016, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/0ushin/\\_icsFiles/afiefieldfile/2017/01/10/1380902\\_0.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/0ushin/_icsFiles/afiefieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf)
- 4 村上裕介, 「美術科授業における彫刻技法に関する教材について—乾漆彫刻技法のモデリングペーストによる応用—」, 兵庫教育大学研究紀要, Vol.52,2018
- 5 村上裕介, 「カシュー鏝による脱乾漆造像法について」, 兵庫教育大学研究紀要第30号, 2007

## 参考文献

- 久賀谷亮, 「最高の休息法」, ダイアモンド社, 2016  
大宮司, 上野武治, 石田真奈美, 角哲雄, 「大学病院に

おける神経科作業療法の試み」, 北海道大学医療短期  
大学部紀要。6, Pp.11-22, 1993

栗原典子, 「スラブ世界のイースター・エッグ ピー  
サンキからインペリアル・エッグまで」, 東洋書店,  
2008